KINDAI KENCHIKU

近代建築

August 8

Vol.76
2022

特集　保育建築の計画と設計

鼎談　設計プロセスを通じた保育づくり

箕輪 由紀（社会福祉法人 楽山会　椎の実子供の家 園長）
渡辺 治（渡辺治建築都市設計事務所 所長）
【進行】**佐藤 将之**（早稲田大学人間科学学術院 教授）

◆保育のカタチをデザインする

佐藤　今回の鼎談では、保育建築の設計プロセスを通じて、保育力の向上にどう寄与できるかについてお話を伺いたいと思いました。私は、保育建築をデザインすることは、どんな子どもに育って欲しいのか、つまり保育のあり方をデザインすることが重要であると考えています。昨今、設計のプロセスにおいて、ワークショップという手法がよく用いられますが、実は私自身は建築をデザインしていくというよりは、保育を一緒にデザインしているような感覚で行っています。

最近、私が計画アドバイザーとワークショップのコーディネーターとして関わらせていただいた「椎の実子供の家」（本誌P.140掲載）というプロジェクトは、まさに保育のあり方を考えながらつくり上げた建築でした。今日は、椎の実子供の家の園長を務められている箕輪由紀先生、設計を担当された渡辺治建築都市設計事務所の渡辺治さんのお二方にご参加いただいてお話を伺っていきたいと思います。

まずは、ワークショップの話からスタートしたいと思いますが、印象的なエピソードとして、保育者のみなさんとのディスカッションのなかでトイレの配置の話がかなり盛り上がりましたよね。

箕輪　一回ではまとまらなくて持ち越しましたよね。

佐藤　実はこの議論って、どのような保育をしたいのかという保育者の思いがすごく印象的に出ていると思っています。当初案は保育室を出て少し離れた位置にまとめてトイレが配置されていたプランで、その方が管理をしやすいし、少しは我慢をしてトイレに行くことを覚えさせることも大事だという意見もありましたが、その一方でやはり保育室のすぐ近くにもトイレがあった方がよいのではという意見が出てきました。後者は子どもたちが保育室や保育室まわりで友だちと楽しく活動しているなかで、トイレに行く行為によってその遊びや子どもたちの関係が途切れないようにして欲しいという保育の視点からの意見でした。トイレって設計する側にとって、サブ的な位置づけになりがちですが、保育者にとっては子どもたちにどう過ごして欲しいかという、保育の方向性を決定づける重要な要素であると改めて気づかされました。

渡辺　最終的には、集合トイレとは別に保育室に小さなトイレもつくりましたが、それはトイレに行きたい子どものなかには、介助しなければいけない子どもがいるというのも理由のひとつですよね。

箕輪　3歳児の場合、幼稚園ですとおむつがとれて自立してるというのが前提になっていますが、やはり保育園ですと3歳児でもとれていない子が多くて、とくに2歳児クラスから3歳児クラスに進級してすぐの時期には、2歳児クラスの時は保育室内にトイレがあったけれども、3歳児になったら急に保育室から少し離れたところにある集合トイレに一人で行くことになったり、まだおむつを交換しなければならない子どもがいたりすることを考えるとやっぱり難しいですよね。

今まで何十年も保育室の中にトイレがあった環境で保育をしてきているので、保育者もその環境に慣れていることもあり、幼稚園のように廊下に出てトイレに行くというのは保育者にとってはなかなかイメージが沸きにくかったのだと思います。

渡辺　保育者からすると、いちいち離れたトイレに行ってズボンを下ろして介助するのは大変だという考えが出るのも当然ですし、一方でそのくらい自分でできるようにならなきゃだめだっていう話もあったわけですよね。

保育室に設けられたトイレ

箕輪　一人でできるようになって欲しいという思いと現実とのギャップが。やはり、3月生まれと4月生まれでは1歳違いますからね。

渡辺　私も幼稚園の時を思い出すと、友達にうんちの時にお尻ふいてくれって頼まれたこともありましたが、同じクラスでも介助が必要な子がいるんですよ。

箕輪　私たちも3歳児クラスになる前におむつを取ろうと頑張ってはいますが、この年齢になったら取ってくださいというように一律には切れないので、やはり個人差に配慮しなければいけないと思っています。

渡辺　今のは3・4・5歳児クラスのトイレの話なんだけれど、実はトイレは0・1・2歳児の方が、いろいろなノウハウが求められるんですよ。保育建築の設計に慣れていない人は普通にトイレを作ってしまうけれど、保育にとって一人でトイレに行くことはとても重要で、自分で下着をとってきて、自分でズボンを下ろして、そこへ並ぶという行為のスペースがいるわけです。

箕輪　それから、保育園は幼稚園と違って、園で過ごす生活時間が長いというのが大きな違いで、早い子ですと朝7時半くらいからいて、延長保育までとなると19時半までいるので、長い子ですと12時間いるわけですよね。そう考えるとトイレに行く頻度や時間はそれなりになります。幼児になればなるほど使用頻度が高く、だんだんと自分でできるようになっていくわけですが、段階があるということです。

渡辺　おそらく、3・4・5歳児で比べると幼稚園と保育園では自分でトイレができる子とできない子の比率が違うと思います。保育園で育った子が自分でできるようになっているのは、保育園自体が日常生活ができるようになる訓練の場所になっているからです。

箕輪　就学前に日常生活の身辺動作の自立というのが保育での大きな目標ですからね。

佐藤　今の話を少し補足しますと、0・1・2歳児クラスの保育を受けている子が3歳児クラスに移行した場合は自分でできる子が多いと思いますが、ただ日本の育休制度を考えると、3歳児クラスから入る子もいて、そういう子どもたちはいきなり保育施設に入ることになるので、自分でトイレができない子もいるわけです。これまでは、一斉に多くの子どもたちを捌けるような建築のつくり方をしてきたので、個々のニーズや個人差に対応できるようにして欲しいという声が出てくるわけです。そういう世の中のニーズが、今のトイレの話はわかりやすいかたちで表れていますね。

◆大きなホールの価値

佐藤　基本設計を進める上でのワークショップでは、トイレの他に保育室とホールと園庭のつながりについてもみなさん関心を持たれて、いろいろな意見がでましたね。

渡辺　最終的には保育室からホール、そして園庭につながる空間構成になりましたが、当初はみなさん抵抗を示されました。後ろに廊下を作って、保育室があって、テラスという構成にこだわられていて、「ここは半戸外になりますよ」と説明していくうちに、途中からホールをつくる計画になりました。実際に使ってみていかがですか?

箕輪　昨年の12月に新しい園舎ができて、引っ越してまだ3、4カ月なので、正直、私たちも使い方を模索している段階で明確な答えは出ていませんが、当初から乳児と幼児のホールがそれぞれ欲しいという保育者からの要望がありました。以前はホールが1つしかなかったので雨の日は幼児の子たちの課外活動などで使用しているので、乳児の子たちはひたすら保育室の中で遊ぶしかなかった。でも今は1階と2階にホールが分かれていて、乳児のホールに幼児が通ることもなく、安全に遊べる環境ができました。大きなホールなので一斉に出てこられますし、段差のある部分が舞台になって入学式や卒園式などのセレモニーにも利用でき、以前あったホールと同様な使い方もできます。

渡辺　ホールではみんな走り回っていますか?

箕輪　広いから走っていますよ。

渡辺　他の園での話ですが、保育室の前にホールがあると子どもたちが走り回るのが嫌だっていう意見を結構耳にするのですが、どうですか?

箕輪　私の印象ですが、考えていたよりは走っていないと思いますね。

渡辺　騒ぐとテンションが上がりすぎて、保育上よくないのではという意見がどこの保育園でもこれまで若干ありました。でも最近、アメリカの論文などを読みますと、子どもはよく寝かせてよく走らせた方がストレスがたまらないって書いてありましたが、どうですか?

箕輪　禁止事項が多いよりはある程度自由にできる方がよいと思いますし、ホールに危ないものは置かないようにしているので、見渡せる範囲の中で走る分にはそれほど問題視していません。それよりも保育者たちは、園庭で遊んでいた子どもたちがクラスまで少し距離があるので、走ったり、散ってしまうのではないかと心配していましたが、案外そうでもなく、子どもたちは一直線にクラスに向かってく

れています。なかには離れちゃう子もいますけれどね（笑）。

佐藤　今のお話を伺っていると、騒いだり、発散したりする場所と比較的落ち着いて過ごす場所があって、保育者も子どもたちも場所によって気持ちの切り替えをしながら使用するイメージでしょうか。

箕輪　今は園庭が整備中なので、園庭で思いっきり遊ぶことができませんが、園庭が完成したらそのような使い方をすると捉えています。

渡辺　広いホールが園庭として機能している？

箕輪　雨の日や外に出られない場合に、保育室を出てたところに遊べる広い空間があるというのは、場面の切り替えもできるし、そういう意味では子どもが大きく身体を動かして遊びたいという欲求を室内でも叶えられるのはよいことだと思います。

佐藤　雨の日とそうではない日とで、ホールの使い方も変わってきますか？

箕輪　雨の日だと少しでも体を動かして遊べるようにトンネルをくぐるような遊具を出したり、平均台など少しアスレチック的な遊びができるような環境設定をしています。

渡辺　私はこれまでの設計で、保育室を出るとホールになっているプランをいくつか作った経験がありますが、やはりそういう空間で育った子どもは足が速くなって、小学校に上がったときにリレーの選手になる子が多い印象があります。保育園対抗でやると圧倒的に早い。やっぱり園庭とか大きなホールを持っていないと足が発達しないんでしょうね。子どものテンションも違うし、のびのび感といいますか、精神的にも違った育ち方をするのではないかと思いますね。是非、心理学的な観点からも調査をして検証して欲しいですね。

箕輪　今、のびのび感っておっしゃいましたけれど、前と比べて広くなったせいかのびのびと過ごしているように感じています。

渡辺　子どもたちが距離を取りたいところで取れるということは大事ですし、そこがのびのび感につながるんでしょうね。

箕輪　そうですね。

渡辺　やっぱり夫婦も狭い部屋に住んでいるとだんだんギスギスしてくる。それと似ていますよね（笑）。

箕輪　保育する側も狭い場所よりは、ある程度自由にできるスペースがあった方が、ここだったらこういうこともできそうだねというように、新しい使い方が生まれる気がしますね。

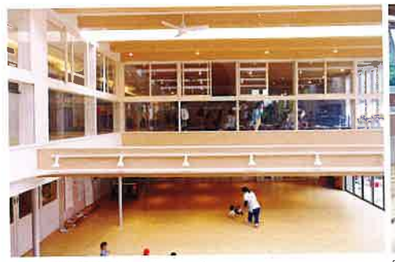
◆「見える」「見えない」

渡辺　私は保育建築をつくる時にガラスを結構多用することがあるのですが、批判を受けることも多いんです。保育士さんの仕事はかなり孤独な面もあると思っていて、保育者同士がコミュニケーションがとれない環境ですとだんだんモチベーションを失っていくので、お互いが見えた方がよいと説明するのですが、それだと保育がしにくいと言われることがあります。

箕輪　私ともその話をしましたよね。孤独を感じたことはありませんが、保育をしていると突発的なことが起きたりしますし、何か困った時にすぐに助けを呼べるという点では、保育室同士が壁で見えないよりも、例えばドアのところがガラスになっていたりした方が、お互いの気配が感じられてよいと思います。

渡辺　今回の設計では、ホールの吹抜に対しては透明なガラスになっていて、保育室同士の間は子どもたちがお互いを気にし過ぎないように腰パネルとし、大人の目線では透明なガラスにしましたが、保育者同士の一体感がうまれたり、なにか変化が見られますか？

箕輪　1階のホールからも2階の幼児クラスを見渡すことができて、私が直接上まで行かなくてもなんとなくどんなことをやっているのかわかったり、ちょっと怪しい動きをしている子どもがいるとわかったりします。下で保育している人たちが上の子どもたちの様子に目が届くし、子どもたちも上から手を振ったりしてくれるので、そういう点では上下階で一体感がうまれた気がします。


1階、2階に設けられた大きなホール

2階ホール（遊戯室）から下の様子を覗き込む子ども

子どもと大人の視線に考慮した保育室

渡辺　保育園って、若い女性が多い職場だと思いますが、子育てをしたことがない保育者は、いろいろと悩みながら保育をしていると思うのです。ベテランの保育者の目線を感じながら保育をできる方が、安心感も出るし、保育にとってよい方向に働くと思います。

箕輪　隣でなにか面白いことをやっていたら、自分たちもなにか面白いことをやろうよというふうに、クラス同士でも刺激し合いながら保育を行えればよいですよね。見えない環境ですと、せっかくよい保育をやっていても他の人がわからないわけですから。保育って数値化して質のよさを測れるものではないので、日頃から、子どもたちの笑い声だったり、表情だったり、反応だったりを見て感じてもらうことが、保育力の向上につながると思っています。

渡辺　子どもたちを喜ばせることがうまい保育者っていますよね。子どもたちがすごく喜んでいる様子を見て、他の保育者が「今なんて言ったの？」って聞きに行くんですよ。

箕輪　私は事務所にいることが多いですが、やっぱり楽しそうな声が聞こえてくると何をやっているのか気になって見に行きますね。どんなことをすると子どもが喜ぶのかを実際に見て感じ取ることができますし、それはオープンな環境だからこそ気づくのだと思います。

渡辺　オープン化に関連した話として、最近は食育の視点から、厨房の中を見えるようにしていますよね。厨房で働いている方に「オープンになってどうですか？」と聞きますと、「自分たちがつくった食事を美味しそうに食べている姿を見たら働き甲斐がでました」と回答してくれます。そうあって欲しいと思いますが、厨房の中は大人同士の世界なので、たまには言い合いになったり、人間関係がぎくしゃくしたりすることもあるそうで、そういった場面を子どもたちに見られたくないこともあって、オープンにしたくないという話も聞くことがあります。

箕輪　現在のランチルームのある棟は11年前に増築しましたが、建替える前は北側の日の当たらない場所にあって、調理師さんや栄養士さんの顔が見えないところで給食が作られていましたね。

渡辺　休憩室がないケースこともあって、保育者だけでなく厨房で働く人の職場環境も考える必要があるのではないかと思うことがあります。

箕輪　ランチルーム棟を増築した時に、理事長が、給食を作る人も保育園の先生だし、子どもに作っている姿を見せた方がよいということでオープンにしました。子どもたちは作っている姿を見て、匂いも感じて、給食の先生に今日のおかずは何かを尋ねたり、会話や交流が生まれたりして、子どもたちが給食を楽しみにしている光景が見られるようになりました。給食の先生も子どもたちが食べる様子を見て、これは食べにくそうとか、これは人気がないとかわかるのはよかった。

佐藤　学校の改革でも、オープンプランスクールというのが流行りましたけれど、教育内容がオープンだから空間もオープンであってもよいのではないかという話と一緒で、保育も厨房も見せ合うことでお互いに高め合うことができるので、オープン化したり、隣の保育室から大人の目線でガラス越しに見えたりするケースが増えましたね。

渡辺　オープンにすることで、働き甲斐にもつながるし、もし怒鳴りながら保育をしていたら、まわりに聞こえてしまうのである種の抑止効果にもつながる。「見える」「見えない」っていう話はすごく重要だと思います。

箕輪　私も「見える」「見えない」は、結構重要なポイントだと思っています。保育園によっては保護者をクラスの入り口よりも先に入れないところもあるんですよね。特に0歳児クラスだと、保育室の奥でどんな保育をしているかが見えない園もあって、もちろん衛生的な観点からそうしているのかもしれませんが、見せられないような保育をしていないし、もっとオープンにしてよいと思いますね。

渡辺　「見える」「見えない」ということを強烈に意識し始めたことがあって、早稲田大学の先生が、リモートで工事現場の管理をするシステムを開発したのですが、最初は現場の職人が嫌がるかなと思ったのですが、実際に設置してみるとできる人ほど見て欲しいというのがわかった。しかも現場の士気が高まるとのことでした。

箕輪　今回新しく建てた園舎には、もし園内で事故があった場合に検証できるように、安全対策の観点から防犯カメラを保育室につけることになりました。最初は、常に見張られているようで嫌だなという思いもありましたが、別に人に見られて困る保育をしていないし、みんな自負を持って仕事をしているので保育者からの抵抗はありませんでした。

実は副産物的に防犯カメラの使い道がありまして、コロナウイルス感染者が出た時の園での行動調査に役立ちました。記憶だと曖昧になってしまいますが、どの子とどの子が一緒におしゃべりをしていたかとか、どんな接触があった

かを正確に確認でき、濃厚接触者にあたるかどうかの判断材料になりました。

渡辺　それはコロナならではのおもしろい活用の仕方ですね。

◆地域に開かれた保育のあり方

佐藤　少し話題を変えますが、この園のもうひとつの特徴は、地域交流室と隣接して大きな吹抜の土間空間（プロムナード）があります。この地域交流室を設ける背景を少し説明しますと、政府が唱える「新しい公共」という考えがあって、つまり、公共サービスの担い手を官から地域へとシフトさせる動きで、なかでも社会福祉法人は地域貢献をやってみようという考えが広がってきています。それで昨今では保育建築や高齢者施設に地域に開放するスペースがつくられるようになりました。

渡辺　実際に児童福祉法で法律的にも地域に貢献する活動をしなさいということが盛り込まれています。ただ、どういうことをしなさいとは書いていないので、各自考えながらやっているのが実情です。自治体によってはこういうことをすれば補助金をつけますよというケースもあります。例えば、子育て広場をつくったらスタッフの給料を出しますよとか。

佐藤　今回も補助金を申請するために、どのようなかたちで地域に開くプログラムをこれから展開していくかについて園と一緒に詰めていく段階ですが、何かお考えはありますか?

箕輪　まだ、具体的には考えられていませんが、設計上は、地域交流室のガラス戸を開放して土間空間とつなげてオープンに使えるようにしていますよね。

渡辺　そういう使い方もできますよね。あの土間空間はマルチな場なので、いろいろな使い方ができますが、これから地域交流室という特殊な空間ができるので、テーブルと椅子を置いてカフェのようすれば、みんなの休憩室にもなるし、父兄さんがお迎え時間まで過ごせる場所にもなる。地域交流室と土間空間を合わせて100㎡くらいの広さがありますからね。

佐藤　むしろ保育者の人たちも出てきて欲しいと思っていて、保育と地域が混ざり合うくらいの方がよいなと思っていましたが、保育者の話を聞くとやはりそこは線を引きたいという話がでたので、園から独立した空間になっています。勤務時間内に保育者が子どもたちと離れることノンコンタクトタイムといいますが、休憩時間にそこを利用して、気持ちを切り替える空間としても利用できるのでいろいろな可能性があると思っています。

箕輪　今回のプロジェクトでは、法人の意向もあって、保育園としての機能だけじゃなく、街の居場所としての保育園づくりを目指していくなかで、地域の人たちがもっと気軽に立ち寄れる場所になればよいと思いました。例えば、地域の子どもや子育て中の方がふらっと立ち寄るだけでもいいし、役所に相談するには敷居が高いけど、あの保育園の先生に相談してみたいという時に来ていただいてもいいし、保育園の中だけで役割を果たすのではなく、地域の中で困っている人の最初の窓口になればよいと思います。

佐藤　相談所というのぼり旗をあげてしまうと、相談したい人がまわりの目を気にしてしまうこともあると思うのです。子ども食堂も同じで、そこに行くと貧困の子という偏見が生まれてしまう可能性があるので、もっと自然なかたちで立ち寄れる場所にするには、活動のシーンをつくってあげると行きやすくなります。例えば、英会話教室をやって、その後にみんなで食事をするかたちとか。

箕輪　自然に人が集まって、自然にできる状態がいいですよね。

渡辺　父兄同士が来て、コーヒーが飲めるだけでも十分ですしね。それで、子育てのストレスが少しでも緩和できれば。

箕輪　地域の問題としては、近くにスーパーがなく、買い物難民を生んでいます。ようやく昨年から、移動スーパーが巡回して、週に何回か来てくれるのです。

例えば、日替わりでパンを売りにくるとか、クレープ屋さんが来るとか、野菜を販売するとかそういう場所になるといいですね。

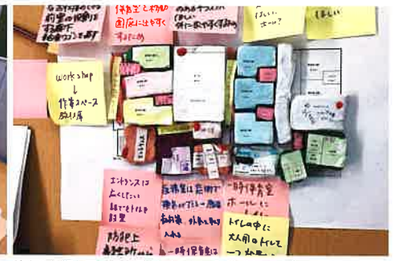
◆ワークショップを通じて感じたこと

佐藤　最後に改めてお伺いしたいのですが、今回設計する際にワークショップをやってどんな感想をお持ちですか?

箕輪　以前ランチルーム棟をつくった時のように一部の上の人たちだけが考えて決めた過程とは違って、今回はワークショップを通じて、みんなで話し合ってつくりましたので、もちろん要望が通らなかったこともありますが、それは話し合う過程で、そういう理由だからしょうがないというように、一つひとつ折り合いをつける時間があった。先ほどのトイレの話もそうですが、どうしても譲れないところを主張できる場があったのはよかった。

地域交流スペースで渡辺氏や佐藤研究室の学生らが図と共に使い方を議論。写真奥に見えるのが土間空間（プロムナード）

ワークショップの様子



砂土や付箋を用いて、保育しやすい空間構成をスタディ

渡辺　以前より、団結力が高まったとか、お互いによく会話するようになったとか、変化はありますか?

箕輪　団結力は前からあるので（笑）。でも、ワークショップを通じて、保育をする上で環境の大事さにみんな気づいて、建物に関心を持つようになったと思います。子どもだけでなく大人の動線も大事で、それが働きやすさにつながるといったようなことを考えるきっかけになったことはよかったと思いますね。人任せにしてしまえば、考えなくてもよいので楽ですが、ワークショップがあったから保育という視点でいろいろな要望を伝えることができました。

例えば、当初、保育室同士の扉を全体透明なガラスで提案されていましたけど、下部を木、上部をガラスに変更してもらいました。それはなぜかというとデザイン的には全体がガラスの方がきれいなのかもしれないけれど、子どもの目線で見た時に隣でなにか活動していると気が散ってしまいます。それは私たちがどのように保育をしたいかという、つまり保育の視点であって、建築の視点ではありません。でもこういうところに保育者が入っていかないと、保育をする側の視点は反映されない。結果、このような扉の仕様にしてもらって大変満足していますし、上部はガラスになっているから、大人の視線では隣で何をしているかがわかるので、保育しやすい環境になりました。

佐藤　ありがとうございます。冒頭に話をしました保育の視点でデザインをするという今回のテーマをきれいにまとめていただいたようなお話でした。最後に、数多くの保育建築を設計されている渡辺さんから何か伝えたいことはありますか?

渡辺　次回は是非、保育者の働く環境や人間関係をテーマにして欲しいです。私は、保育の質=保育者の質だと思っているのです。先ほどの「見える」「見えない」の話も含め、働きがいに繋がるとか、良好な人間関係が構築できるというのは、建築環境とすごく関連しています。

佐藤　ある程度調査した結果はありますが、新しいミッションをいただきましたので、別の機会で伝えたりかたちにしていきたいと思います。本日はありがとうございました。（了）

（2022年4月21日収録）

右／箕輪 由紀（みのわ・ゆき）
看護師として病院等勤務後、社会福祉法人楽山会 椎の実子供の家入職。2014年保育士資格取得。2020年より現職。日本モンテッソーリ教育綜合研究所認定教師（0〜3歳）。

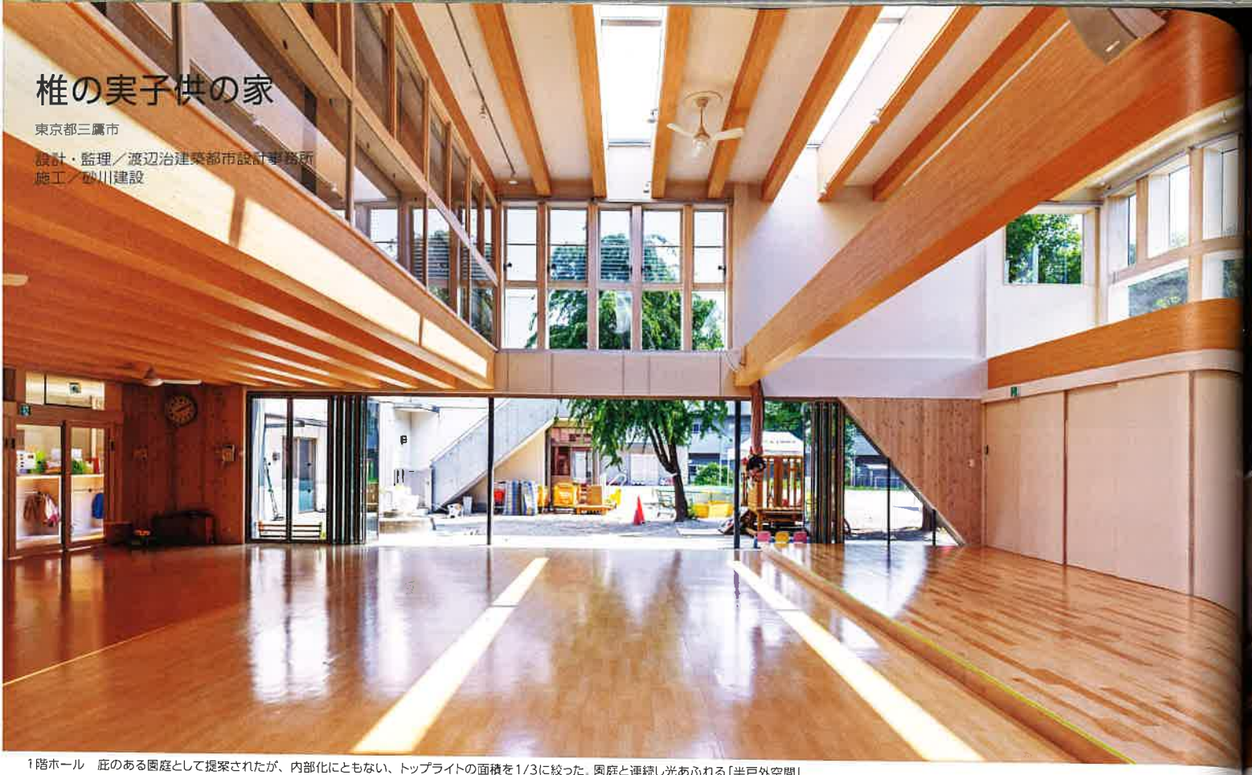
中／佐藤 将之（さとう・まさゆき）
秋田高校卒業、新潟大学工学部建設学科卒業、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士（工学）。江戸東京博物館委嘱子ども居場所づくりコーディネーター、日本大学・湘北短期大学・東京大学大学院教育学研究科 非常勤講師、早稲田大学人間科学学術院助手等を経て、現職。「思いと環境をつなぐ保育の空間デザイン 心を育てる保育環境（小学館）」で2020年度こども環境学会論文著作奨励賞を受賞。

左／渡辺 治（わたなべ・おさむ）
1959年北海道生まれ。1985年北海道大学修士課程修了、1986年ペンシルバニア大学修士課程修了、1991年東京大学博士課程（高橋鷹志研究室）修了。1992年渡辺治建築都市設計事務所設立。1996年シビル設計コンサルタント設立。2005年川崎ファクトリー主宰。技術士（都市及び地方計画）、一級建築士、工学博士。
教員履歴として、千葉工業大学非常勤講師、日本大学非常勤講師、日本工業大学非常勤講師。
主な受賞として、2015年 都市景観大賞（国交省大臣賞）、2016年 キッズデザイン賞 最優秀賞（内閣総理大臣賞）、2017年 日本建築学会賞（業績）、キッズデザイン賞 優秀賞（少子化対策担当大臣賞）、2021年 グッドデザイン賞金賞（経済産業大臣賞）、アジア都市景観賞（国連ハビタット）などがある。

椎の実子供の家

東京都三鷹市

設計・監理／渡辺治建築都市設計事務所
施工／砂川建設



1階ホール　庇のある園庭として提案されたが、内部化にともない、トップライトの面積を1/3に絞った。園庭と連続し光あふれる「半戸外空間」

左上／道路より子育てプロムナードを見る　右上／子育てプロムナードと連続する地域交流サロン*　左下／2階遊戯室から吹抜を見る　中下／光あふれるホールで遊ぶ子どもたち　右下／3・4・5歳児室

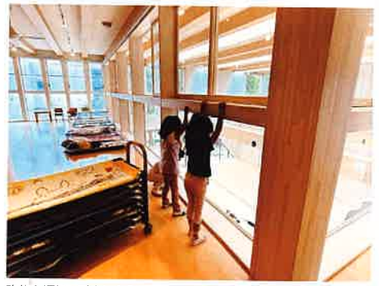
みえる・みえない：ナイチンゲール病棟効果※

保育士が一つの保育園から集団で辞めるということがしばしば報道される。保育士が園を辞める理由の筆頭が「職場の人間関係」である。はたして建築は人間関係構築にどれほど貢献できるだろうか。

これまで保育園の設計では、保育室間同士、保育室とホールとの間の構造壁以外の壁、扉などには極力透明ガラスを入れて、相互間が見えるように、またホール側から園長先生が見回った時に、スタッフとの間にコミュニケーションが生まれるように意識して設計を行ってきた。その結果、上下階で子どもたちがガラス越しのコミュニケーションを行う様子が頻繁に観察されるようになった。

また、箕輪園長先生は、「保育室同士の動きが見えて、助けが必要な時には駆けつけられるようになった。見てまわりながら、職員との目でのコミュニケーションを取るようになり、保育園全体の団結が高まったように思う」という。

1室で患者を看るナイチンゲール病棟と同様な効果が確認されたと言っていいのではないだろうか。　（渡辺 治／渡辺治建築都市設計事務所）

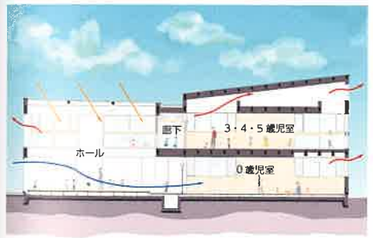


吹抜を通じて呼応し合う*

※ナイチンゲール病棟効果：「30人の患者の看護観察をするためというより、まだ十分に熟練看護師が育っていない当時、未経験の看護スタッフの作業をベテランの看護師長が見張れることを考えていたようです」長澤 泰　2022.5 建築士 P.6

道路より「子育てプロムナード」吹抜部を見る

園庭より吹抜のホールを見る。 サッシを全開にすると、内外部が連続し不思議な感覚の空間となる



断面図

配置・1階平面図　縮尺1/1,000

2階平面図

「子育てプロムナード」（1階平面図赤点線枠内）：保育所での活動を周辺と共有できる空間を街路に沿って確保した。隣接する「地域交流サロン」では、日本財団「こども第三の居場所」事業が認められ、近隣からの参加者を求めながら、園は早稲田大学の佐藤将之研究室とともにワークショップを開き、運営準備を進めている。

椎の実子供の家　データ

所在地　東京都三鷹市大沢4-8-8
主要用途　保育所
建築主　社会福祉法人 楽山会

渡辺 治……わたなべ おさむ
1959年北海道生まれ。1985年北海道大学修士課程修了、1986年ペンシルバニア大学修士課程修了、1991年東京大学博士課程（高橋鷹志研究室）修了。1992年渡辺治建築都市設計事務所設立

前室に待機する子どもたち*

設計・監理　渡辺治建築都市設計事務所
担当／渡辺 治、田中正道、山崎智貴、沖水理恵、早川 建
構造　リズムデザイン構造設計事務所
担当／中田琢史、斉藤美幸
設備　Y.M.O.　担当／山田浩幸
計画アドバイザー・ワークショップ
佐藤将之、堀越まい（早稲田大学人間科学学術院）
施工　砂川建設
担当／日野口和美、山内惇平
設計期間　2019年2月～2022年3月
工事期間　2020年12月～2022年3月

[建築概要]
敷地面積　3,855.25㎡
建築面積　963.92㎡（全体：1,508.89㎡）
延床面積　1,623.55㎡（全体：2.213.81㎡）
構造規模　木造、耐火建築物　地上2階
寸法　最高高さ／9.200m　軒高／6.760m　主なスパン／6.25m×12.0m
地域地区　第1種中高層住居専用地域

[施設概要]
定員　107人
1クラス人数・面積　0歳児：9人・46.93㎡　1歳児：18人・62.12㎡　2歳 児：20人・51.56㎡　3・4・5歳 児：60人・119.83㎡（3歳児 20人、4歳児 20人、5歳児 20人）
一時保育：6人

[主な外部仕上げ]
屋根・外壁　ガルバリウム鋼板、シート防水、窯業系サイディング
建具　アルミ製建具
外構　コンクリート金ごて、石材、ウッドデッキ

[主な内部仕上げ]
ホワイエ　床／磁器質タイル　壁／ビニルクロス、杉板t12＋塗装　天井／岩綿吸音板t9 梁型：ビニルクロス
保育室　床／長尺塩ビシート　壁／ビニルクロス、杉板t12＋塗装　天井／岩綿吸音板t9 梁型：ビニルクロス
ホール　床／長尺塩ビシート、天然木複合フローリングt15　壁／ビニルクロス、杉板t12＋塗装　天井／岩綿吸音板t9 梁型：ビニルクロス

撮影／永石写真事務所　永石秀彦
*撮影／渡辺治建築都市設計事務所

協力会社

構造プレカット・製作金物納入	タ		ツ	三
建具製造（イスターカーテン）	T	O	K	O

たまほいくえん

東京都昭島市

建築・監理／アク・渡辺治設計共同企業体
施工／砂川建設

2階テラスにかかる大きな庇。雨よけと日除けになる*

左／空への階段*　右上／土間より空への階段を見る　右下／3・4・5歳児室。空への階段をはさんで隣の保育室が見える。靴脱ぎ台をきっかけとして色々な活動が発生している

直射光を建物のまん中に入れる、大きな屋根の外部空間

― 直射光と健康

建物の中央部に大きなトップライトを設け、直射光を入れた。ボリュームが大きく、中央部は暗い箇所を明るくするためと、冬季のパッシブによって熱を入れるためである。夏は、トップライトの下の窓から熱を捨て、冬季は熱を受ける。

そうしたところ、直射光の下で子どもたちの活動が光にからんで発生する様子が観察されるようになった。夏に園庭で遊ばせる時などは、紫外線が心配されるのであるが、このような様子を観ていると、子どもは直射光が好きなのかもしれない。本をわざわざ直射光に当てて読んでいたり、ゲームをしたり、そこに居たり、集まったり。太陽光を受けると、ビタミンDが体内にでき、脳内物質が分泌され、ストレスが解消され、健康になる。思いおこせば、かつての子どもは真っ黒に日焼けた子がほとんどだったが、太陽光の下で遊ぶことは子どもにとって必要なことだったのである。

― 子どものストレスと運動

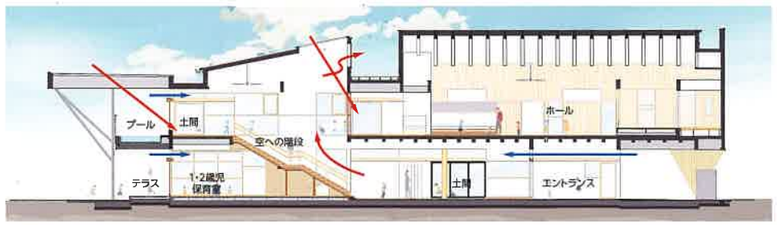
園は計画当初から、北側の入り口から入って、靴を脱ぎ変えずに、南側の園庭に駆け抜けることにこだわった。階段をかけ登って2階にも土間のところで、荷物を置いてテラスに出ていき、外階段をかけ下がって園庭に到達する。朝から朝日を受けて元気いっぱいに体で遊ぶ。子どももストレスが溜まる。運動で発散させると、子どもは落ち着いて過ごせるようになる。

2階には広い屋内のホールがあり、園庭には大きな庇が3階レベルにかかっているので、雨の日でも、内外部で子どもたちは走り回れるのである。走ることは細胞が活性化し、太陽光を浴びた時に出る同じ脳内物質が放出され、メンタル面も強くなり、積極的な思考体系となる※。子どもはよく走り回るが、これは本来心身とも正常に発育するためには必要だった。

（渡辺 治／渡辺治建築都市設計事務所）

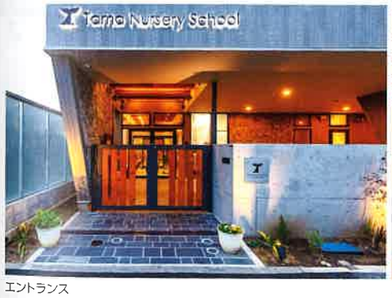
2階平面図

1階平面図　縮尺1/800



断面図

※医療法人社団平成医会HP「セロトニンの増加が心身に及ぼす効果」著者:長谷川 大輔 精神科専門医 医療法人社団 平成医会



エントランス

パントリー　食事のならんだカウンターから各自が取って運ぶ*

土間から1・2歳児保育室を見る。入口踏み板に座ってくつをぬぐ

たまほいくえん　データ

所在地　東京都昭島市東町5-1-40
主要用途　保育所
建築主　社会福祉法人 多摩育児会

西射日光の下で本を読む*

設計・監理　アク・渡辺治設計共同企業体
担当／アトリエアク：鈴木敏司、岩本康治
渡辺治建築都市設計事務所：渡辺 治、川合麻美
構造　リズムデザイン構造設計事務所
担当／中田琢史、斉藤美幸
設備　三高設計　担当／池宮城慎作、石丸隆行
施工　砂川建設
担当／奥山直樹、梶 正樹、相馬竜也
設計期間　2019年8月～2022年3月
工事期間　2021年3月～2022年3月

[建築概要]
敷地面積　1,214.68㎡
建築面積　834.72㎡
延床面積　1,492.75㎡
構造規模　木造、耐火建築物　地上2階
寸法　最高高さ／9.950m　軒高／6.950m　主なスパン／7m×6.3m
地域地区　第1種住居地域

[施設概要]
定員　151人
1クラス人数・面積　0歳 児：11人・60.60㎡　1歳 児：22人・95.36㎡　2歳児：22人・56.33㎡　3・4・5歳児：96人・234.09㎡（3歳児 32人、4歳児 32人、5歳児 32人）

[主な外部仕上げ]
屋根・外壁　ガルバリウム鋼板、シート防水、窯業系サイディング
建具　アルミ製建具
外構　コンクリート金ごて、石材、タイル

[主な内部仕上げ]
土間　床／磁器質タイル　壁／珪藻土　天井／岩綿吸音板t9
保育室　床／天然木複合フローリングt15　壁／杉板t12＋塗装　天井／岩綿吸音板t9
ホール　床／天然木複合フローリングt15、チーク無垢フローリング　壁／杉板t12＋塗装、ビニルクロス　天井／岩綿吸音板t9

撮影／永石写真事務所　永石秀彦
*撮影／渡辺治建築都市設計事務所

鈴木 敏司……すずき としじ
1949年山口県生まれ。1973年武蔵野美術大学造形学部建築科卒業。1974年アトリエアク設立。1980年㈲アトリエ アクに改組。1991年㈱アトリエ アクに改組

渡辺 治……わたなべ おさむ
1959年北海道生まれ。1985年北海道大学修士課程修了、1986年ペンシルバニア大学修士課程修了、1991年東京大学博士課程（高橋鷹志研究室）修了。1992年渡辺治建築都市設計事務所設立

協力会社

構造プレカット・製作金物納入				タ		ツ	ミ
床	暖	房	工	事	日		興
デ	ッ	キ	納	入	リ	ー	ベ